

人文学会60周年イベント

～かたちを作る～ イベントで作るかたち

人文学会学生部会一同

■人文学会とは

今年、人文学会は60周年を迎えた。人文学会とは、この神奈川大学の外国語学部と人間科学部によつて構成されている学会であり、該当学部に所属する教授と学生は入学と同時に会員となつてゐる。私たち『PLUS-i』に関わる生徒は、その学会に所属する学生部会という枠組みで活動している。人文学会所属の生徒の代表、と言ひ換えればわかりやすいかもしれない。

人文学会では様々な研究が行われている。特に、文化に関しての研究がされており、「非文字文化」の研究が代表的なものになっている。学生に向けてのイベントとして、毎年、懸賞論文大会が行われている。学生部会の主な活動は、学会が行うこの懸賞論文大会の論文部門以外の部門の評論やの結果が掲載される本誌の編集に関わることである。

しかし、私たちが活動していく常に感じること

は、この学生部会はもちろん、人文学会の生徒への認知が低いことである。入学と同時に会員にされ、実を言うと学費に会費が含まれているのにも関わらず、生徒たちはこの団体も、ここで行われる活動も知らないまま、最悪卒業してしまつてゐるのである。今回、60周年を記念してイベントをしようとの持ちかけが、顧問の先生である深澤先生からあつた際、そのイベントの目的・目標として、「学生にこの学会の存在を認知してもらう事」と言うのが真っ先に上がつた。私たちはこのイベントを通して、何より、「存在」を伝えたかったのであつた。

■イベントの企画・準備、そして実行

イベントの話が持ち上がつたのは今年度の始め、5月であつた。この時点では学生部会のメンバーは二人だけと言う、人員的には危機的な状況であつたが、新たなメンバーの加入や学生部会顧問になつた深澤先生からの助言もあり、イベン

トと言う形を作つていくことが出来た。ここからは、体験、感想を学生部会メンバーそれぞれで振り返つていきたいと思う。



ーてんてこ舞いー

ボスター作製担当 佐藤麻鈴

イベントを行うにあたって、こんなにもやることが多いのかと思ひ知らされた。特にボスター制作については、一番神経を使う作業であった。最初に考えたレイアウトは分かり辛い等の指摘を受けて、どうすればより分かりやすく見やすいものになるのかと何週間も悩み続けた。他のイベントのポスターを参考にしても、センスがないのだから作れるわけがないと自暴自棄になつたこともあった。また、1日中パソコンに向いていたために腰を痛めたり、ポスター制作の責任を重く感じすぎた影響で胃痛にもなつた。やつとの思いで完成した時には、イベントまで3週間を切つており、夏に始めたはずがまさかこんなにも時間がかかるなんて…と驚いたのをよく覚えている。しかしポスターは完成すればそれで終わりなんてことは全く無かつた。ポスターを掲示するためには、大学内なら学生課に申請書類を提出、商店街などなら直にお願いをしに行く、中高学校の場合は各学校の校長・学長宛に依頼文と共に郵送するといふ事が必要になる。これらの部分については、ほぼ学会員だけで行っていたので、文字通り目が回るような思いを誰もがしていたと思う。様々なるサークルや部活にイベント当日の手伝い要請をし

たが、返信がゼロに等しかつたので、「無事にこのイベントを開催できるのか…?」という不安と焦りが混じつた気持ちを常に抱えていたことを鮮明に覚えている。振り返ると、本当にてんてこ舞いな日々であつた。

ー初めての大変さー

ボスター、チラシの作成担当 林日倩

今回の人文学会60周年記念イベントの準備期間は短いと思いました。3年の6月の後半から入ったためか、もうすでにイベントの話が出されており、最初は何をすればいいのか全く分からなくて、大変でした。毎週、お昼にみんなで集まつてどんなイベントにするか、だれが何の役割をするのかを決めていました。私の役割はチラシを作ることでした。夏休みの間に学校に来てコツコツと作りました。他の部員もチラシ作りを手伝ってくれました。だから、チラシはなんと5種類もできました！みんなありがとうございました。また機会があつたら6種類に挑戦しましよう！

チラシ作りは初めてで大変でしたが、そのあと配るほうも大変でした。貰ってくれる人がいなきときは、ちょっと心が折れそうになりました。そして、配り終えたときはもう嬉しくて踊りそうでした。：実際は走りました。そのときにティッシュ配りの人は忍耐力が強いと感じました。これからはなるべく貰うようにしたいと思います。

ー他人を動かす難しさー

イベント第一部企画担当 奥野真名美

今回、イベントを行うという話を聞きした時、突然だつたので正直なところすごく戸惑いました。新メンバーが加わつてまもなくのことでしたし、4名という少ない人数でどうやって進めればよいのかも分かりませんでした。早い段階でいくつか企画案が出たものの、最終的には夏休み直前に今回の企画に至り、HANDSIGNさんに出演依頼を行いました。その後8月初旬、まだ内容が定まっていない段階にもかかわらず会場となるセレストホールの下見と打ち合わせをさせて頂きました。夏休み中は実家に帰省のため直接のやり取りはできませんでしたが、電話やパソコンでHANDSIGN担当者さんとの連絡やボスター制作担当の佐藤さんとデザインの相談をするなど、毎日イベントのことが頭から離れませんでし

たが、返信がゼロに等しかつたので、「無事にこのイベントを開催できるのか…?」という不安と焦りが混じつた気持ちを常に抱えていたことを鮮明に覚えている。振り返ると、本当にてんてこ舞いな日々であつた。

いろいろと準備をして、10月19日は見に行こうと思いましたが、学科の発表（小品）があり、見に行くことができなかつたです…残念無念。機会があつたら、HANDSIGNの手話ダンスだけでも見に行きたいと思いました。

た。私は主に第1部と全体的な進行・準備を行っていたので、慣れない事に頭の整理が追いつかず、だいぶパニック状態に陥っていましたが、当日準備進行スケジュールに対し、図書出版『PLU S-i』を編集して下さっています。)の中村さんよりアドバイスを頂いたことがキッカケで必要事項のリストアップをして全体の流れを掴めるようになりました、冷静になることができました。

後期授業開始(9月21日)寸前からはイベント当日まで1ヶ月を切っていたので、様々な準備でドタバタと走り回っていた記憶があります。この時期私を悩ませたのが、放送研究会の方に読んで



頂くアナウンス原稿の完成でした。以前より少しずつ作成はしていたものの、何分ぐらいがベストなのか、内容はどこまで絞るべきななどを考えて結局出来上がったのが10月上旬だったので、放送研究会の方には練習をして頂く時間が少なかつたのがとても申し訳なかつたです。ここでも、放送研究会の方にヒントを頂いて助けて頂きました。そして同時並行で行っていたのが、当日一番重要となる集客のためのイベント告知でした。メンバーと共にポスター貼付を周辺の学校や自治会などに依頼したり、チラシを校内で配るなどしたりしました。イベントが終わつた今だからこそ

切に感じることは、集客こそがイベント関係者にとって一番の正念場だということです。私たちに足りなかつたことはここで踏ん張りのなさだつたのではないかと思います。

イベント当日、ホールは前日まで他団体の講演などで使用されていたため、ぶつつけ本番で行うことになりました。集客もままならないまま開始されたステージでしたが、舞台の奥の小さなモニターで見ていただけでもHANDSIGNさんのパフォーマンスに釘付けになりました。テレビや動画サイトで拝見していましたが、やはり生でダンスの振動や音響の響きを感じることは格段に違いました。来て下さった観客の方々もとても楽し

んで頂けていて、「プロってすごいなあ」と素人考えですが、改めて思いました。本当に素晴らしいパフォーマンスを観させていただき感謝しています。

そして、舞台裏でご協力いただいた放送研究会の3名の方々には、荷物運びなど役割以上の事をして頂き非常に助かりました。本番でも、機材等に全く詳しくない私たち学生部会のメンバーを自分で支えて頂きました。音響・照明など、放送研究会の方々にお手伝い頂けていなかつたらどうなつていたのだろうと思ひます。

イベント全体を振り返つてみて一番感じたことは、「^{他の}者を動かすこと」の難しさでした。イベントスタッフ募集における他団体へのアプローチの失敗や、メンバーとの意思疎通を合致させる困難さ、そして何よりも、どのようにすればイベントに魅力を与える多くの方々に来ていただけるかが今後の課題だと思つています。そして私自身に関していうと、イベント進行に関して全くの初心者だったので、全て(企画、出演関係者への連絡対応、会場・控室などの確保、スタッフの呼びかけ、当日・準備進行スケジュール、アナウンス原稿の作成、集客など)見様見真似で迷走しながら進めたのが苦しかつたです。しかし、この様な私にとつて非日常的な経験をさせて頂いたことにより、今

後の自分自身の成長を助けてくれる新たな土台を感じることができました。そして同時に、企画をして何かを創りあげる事の喜びも得ることがありました。今回のイベントを進めるにあたり、たくさんの方々にお世話になりとても感謝しています。本当にありがとうございました。

—貴重な苦しさ—

イベント第一部企画担当 萩原愛実

学生部会の活動というのは、基本的に自分たちで企画したものを自分たちのベースでやり、最終的にこの『PLUS-i』に間に合うように記事を作成するといったように、長い時間を設けて行うものが多かった。そのため、上半期にてほとんどの作業を完了させなければならなかつた今回の企画は、時間に迫られる感覚と言うのが強かつた。

イベントの話を聞かされた時は、学生部会の人数の問題や、イベントという大きな行事の活動をやつた前例がないことなど、不安要素が多く、また手探りでやつていかなければならないという状況だった。更に、どんなイベントを行うのか、どうすれば学生たちに参加してもらえるのかといった、配慮しなければならない点が多く、これが企画を考える上でも重荷に感じた。

企画するにあたつて重要なだと感じたのは「明



88 萩原愛実 Kaze・Machi・Zuki, 1998

確なテーマをイベントに持たせること」と「行うにあたつて必要なものを見極めること」というところだ。まず、今回、終盤にかけて焦ることになつたには、ぎりぎりまでイベントの企画が立たなかつたことにある。案は様々なものが出でていたものの、「目的」が明確にならないものが多くつた。5月から6月の時点で一度企画案を出していたのだが、今回対談に参加していただいたわたせ先生に、どんな趣味・興味を持つ学生をターゲットにするのかという事を配慮しつつ、内容の主旨を

は、準備に関してだ。前例がなく、アドバイスをしてくれる方が少ないと、自分たちが思いつく必要なことをイベントに向け準備していくが、当日の運営をしていくとどれだけ不足していたかを痛感した。スタッフの人数、当日の機材の使い方、出演者との打ち合わせなど、私たちが本来やつておかなければならないところを手伝つてくださつた放送部の人たちや出演者側のスタッフさんたちに任せつづきになつてしまつた。この助けがなければならぬとなつて、当日は大混乱になつていただろう。

思い起こすと反省や後悔の嵐なのだが、なかなか体験できないことをこのイベントの企画、運営をすることで体験することができた。様々な分野で活躍なさつている、いわばエキスパートの人たちと少ないながら交流できたことや、裏方仕事など、イベントの運営という立場でないと、触れるこのできない仕事が沢山あつた。このような反省や後悔が出来ること自体、特別なことなのかも

■当日の反響

それぞれが悩み、焦り、走り回る中、10月19日、イベントは幕を開けた。第一部では『動きで作るかたち』と題し、HANDSIGNの方々の手話ダンスのパフォーマンスを行い、第二部では『描写で作るかたち』とし、本学で特別講師をしていただき、漫画家、イラストレーターとしてご活躍されているわたせせいぞう先生を中心とし、本校のジェームズ・ウェルカー先生、HANDSIGNのSHINGOさんに言葉を用いない表現についての対談を行った。

運営側としては、朝から会場の準備や配布物の用意、記録のための機材の設置や、放送部の方々と共に音響の機材の用意など、様々な仕事が残されていた。第一部はHANDSIGNの方々にリハーサルを行つてもらつたが、第二部の対談で使うイラストの投影などは事前確認できず、当日、出来あわせのもので間に合わせる形になつた。

学生部会のメンバーの心配事であつた集客だが、会場の半分ほどの人を会場に集めることができたのではないだろうか。事前に予約してくれた方もいらっしゃり、思つていたほど悪くはなかつたと思う。しかし、本来のターゲットであつた学生が少なかつたことや、会場の座席にはまだまだ



余裕があつたことなど、反省する点は多い。

この日、イベントに参加してくれた方にアンケートをお願いした。参加された方の中には、HANDSIGNの方々が手話ダンサーであること、それに伴つて手話通訳をお願いしていたこともあり、耳の不自由な方もいらっしゃった。その方々からは、こういった手話を広げる機会が少ない中、こういったイベントがあることは頼もしいことだ、と言つてくれた方がいた。そして、HANDSIGNさんと一緒にダンスすることが出来たのだ



が、それが楽しくてよかつたという感想も多く見られた。そして、第二部での対談では、わたせ先生のピクチャードラマ（アニメ）を見る事が出来たのだが、見る機会がなかったので見れて良かったという声や、わたせ先生の漫画の世界で見られるような恋をしてみたいなどの感想が見られた。

しかし、どのアンケートの回答にも、集客に関してもう少し改善すべきだったのではないかと言ふ声が多かった。イベントの内容としては満足だったので、もっとたくさんの人を見てもらえばよかつたという意見もあり、イベントとして褒められた。

められていることは嬉しかったが、告知などの仕事はもっと早く、もっと広く行うべきであつただろ。

りませんでした。ですが、実際に参加してみてよかったです。私は客席からではなく、照明席から見ていたのですが、HANDSIGNさんのパフォーマンスには本当に驚かされました。手話しながら踊るというのは、激しい動きもできず、手話にちょっと踊りを付けたようなものだろうと想像していたのですが、それとは全く違う、想像をはるかに超えたものでした。とんだ甘い考へで失礼しました。

ヒップホップダンスの中に手話を織り交ぜ、それが新たなダンスとして形作られていることに非常に感心しました。そして、体全てを使って表現されていて、手話を知らない私でも何を伝えたいのかしっかりと理解でき、手話が手だけではなく、体全体に広がっていくのを間近で感じました。客席ができるダンスもあり、照明席で軽く踊ってしまうくらい楽しかったです。

このようなイベントにスタッフとして関わることができて、人文学会のみなさんには感謝しています。貴重な機会を提供していただき、ありがとうございました。

私は、この度、人文学会さんからイベントの技術スタッフを依頼された、放送研究会の成田和樹といいます。正直いうと、私は放送研究会にイベントの依頼がくるまで、このイベントのことを知



—手伝ってくれた方の反応—

放送研究会 成田和樹さん

(当日の機材、アナウンスの担当)

私は、この度、人文学会さんからイベントの技術スタッフを依頼された、放送研究会の成田和樹といいます。正直いうと、私は放送研究会にイベントの依頼がくるまで、このイベントのことを知

■最後に

様々な反省点があり、沢山の苦難はあつたが、

私たち学生部会のメンバーにとつては、めつたに体験できない貴重な時間を過ごすことが出来た。手探しの状態であり、何かやつたらいいのか、どうやつたら観客に受け入れられるかという事が心配でならなかつたが、アンケートなど参加してくれた方々の反応を見ると、イベントとしての内容は成功であつたのではないかと思う。

ただ、この手探しの状態のまま終わってしまったこと、十分な集客が得られなかつたことは、繰り返しになるが、本当に、私たちが悔しいと思う点である。そして、何より、私たちがこの活動を発信したかった相手である学生たちに對して、十分に告知できなかつたことが残念でならなかつた。

人に何かを伝えるためには色々な方法がある。特に今回出演していただいた方々は文字を使わない表現と言うものを、常に考え、発信している人たちだ。様々な視点、様々な想像から描き出し、動かし、形を見せていく。私たちも、このイベントを、ひいては学生部会の活動を多くの人に伝えていくためには、もっと沢山の方法が必要だつたのだろうと、準備を通して、当日の講演を通して、深く感じた。